

「けれどサ、五十位になるかな」

「豈夫、四十五ですよ。」

「ふむ、大變な甲羅だ。」

「斯う古になつちや駄目ですネ、負けん氣になつても何うしても若い者には敵やしませんからネ」

「若い者に勝たふと云ふのは量簡だな、婆さんは婆さんらしく念佛でも申した方が値が出るとしたものだ、孫が有るだらうもう」

「獨り身ですよ旦那」

「獨り身は心細いネ、早く工面して隠居するやうに心掛けるんだネ、第一身體が堪るまい」

「皆さんが爾う仰有つて下さいますネ、今の若い妓達は轉ぶことば

かり考へてゐて藝と云つたら一つも満足に出来ませんからネ、見てゐても齒がゆくてなりませんの、ですから此の年になつてまでも藝妓と云ふところを見せうツてンです」

「偉い氣焰だ。氣焰は偉いがネおい、正直な話し婆さんの踊りを見たつて愉快にやなれないせ、藝は下手でも若いのが好いよ」

「まア旦那随分アケスケに仰有いますネ」

「遠慮のないところ爾うなんだから仕方がないよ、」

「まア甚太いこと」

「お前だつても爾うだらう、幾ら顔へ白粉を塗つても、面抜けた物好きでない限りな口説いても呉れまいから面白くないだらふ」

「好かないよ眞個に」

「好かれないうで幸ひサ、お前に好かれちや俺は高野山へ馳け込まなく  
づらやならない」

「何うして斯う……」

「嫌はれたのかツてかい、」

「いゝえサ、お口が悪いんだらふてんですよ、」

「性分だネ」

「嬉しくない性分ですネ」

「併しお前も今日までには色々澤山の男を泣かしたんだからな」

「何うしてイす」

「だつてサ、今にまで爾うやつて線香やハナで苦勞してるところを見ると、決して一人や二人の罪亡しのためとは受け取れないものネ」

「旨いことを仰有るわネ、今更のろける譯でも有りませんけど旦那、  
是れでも昔は遣り手だつたんですからネ」

「爾うだらう〜、何處から遣り手のおかやつてな態度があるもの」

「あらまア、頭底も妻や旦那に太刀打ちは出来ませんネ、何處で御修業  
なすつて」

「何有、お前が昔瞞した男にサ。」

「あれだもの、ほ、、、」

「時にお前は何が好きだ」

「爾つですネ、好きなものは何だと仰有られては鳥渡返事に困ります  
けど、まアお汁粉なんぞ好物で御座いますよ」

「ちよつ、意地の汚いことを云ふネ。食ひ物のことなぞ訊いちやゐない

よ、三味線のことだアネ』

『まあ嫌だ、ほ、、、、糸ですか。爾う金比羅船々なんか好きですわ』  
『金比羅船々で踊れるかい』

『さサ、まだ試して見たことは有りませんがネ、少し六ヶ敷いかも知れ  
ませんネ』

色氣なしで遊ばふと云ふには白粉焼けのした人が好いわ、座敷も若い  
のよりは賑かだし、手に入つたものですからネ、シンミリさせることに  
でも達者だわ。婆だれと云ふとイヤですけれどネ。

### 赤い舌と青い息

術に術があつてお相撲の四十八手裏表どころぢや無いわ、お座敷では

さんざ氣を持たせたやうなこと云つちや、家へ歸ると赤い舌をペロリ、

『彼麼チンケイ糖ツちや有りやしない』

と、斯うよ、澤山のお客の中ですよ。好いたのもあれば嫌なものも  
有るでせう、表部ぢや撰り嫌ひしないやうに見せ掛けて、腹の中では癩  
の蟲やら疳の蟲やら寄つて集つちや評議するの、それが家へ歸つて初め  
て口へ出て來るつた寸法なんだわ。

『旦那ッたら作りごと云つてるンぢやなくつて』

『何だつてだい。』

『さうざんうれしがらせを聴かせて置いて擔ごうつて……』

『何か例の春の衣装の事か』

『だつて心配しますわ、安請合ぢや名高い旦那ですもの』

「十八番だ次ぎは今から三越へ行かふといふんだらふ」

「けれど旦那根性の好いところばかりお見せしたらちや際限が有りませんもの、」

「まあ好いや、お前が爾う疑ふなら早速三越へ出掛けやう、そして見立てるが好い」

「あら嬉しい、自動車でネ」

「うム」

「だから妾旦那でなくつちや駄目だつて云つてゐるだけ、本當に氣前が好いんですもの、」

「イヤにおだてる奴だな」

「おだてる譯ぢやないのよ、眞個よ。妾早く旦那のお側へ行つてお世話

申し上げたいわ、妾それが心願で此頃薬師様へ日参してるのよ、そんなこと御存じないでせう」

「知らなかつたネ、嘘にでも爾う云つて呉ると嬉しいよ、まあ一杯飲め」

「跡で緩手飲みませうよ、ネエ旦那、出掛けやうぢや有りませんか」

「爾うか、よし〜」

「全く旦那は立派な方ネ」

其實は脇を向いて赤い舌をべロリなのよ。それから家へ歸つて來ると、

「女將さん、妾ネ〇〇町の禿ぢやんを旨い具合にトロケさして春のお衣装をしてやつてよ」

「それヤ能かつたネ、」

「で三越へ行つて來たわ」

「もうかい、へい、早いなだネ」

「だつてあの禿げ頭と來たら、馬鹿に氣前の好いところを見せる代り變り易い人なんだもの、少し早や過ぎると思つたけど、御意の變らぬ内とやつつけたんだわ」

「へえ、話したネ」

「全く話しよ、あれで却々好色なんだから、油斷がならないしさ、電軍ぢやないけれど早いが徳だもの」

「それにしてもお前さんの腕前は凄いや、見上げちまつたネ」

「あら妾をおだてたつて何も散財りはしなくつてよ」

「おやく、其奴は損ものだ、ほ、、、」

ところが此の妓の云ふ通り、禿旦氣が多いので間もなく好いのを見つ

けて此の妓を捨てたのよ。

「何有彼物さへモ、にしちまへば用のない爺さんだから構やしない」

と、云つてる内はよかつたが、その着物が出來て三越から届けて來ると同時に、千圓近くのお金を請求されたと云ふと、禿旦と注文に行つた際には手金を置いて來たばかりだつたが、殘金は禿旦が拂ふのだとばかり思つてたのが、構ひつけて呉れもしない今日禿旦が拂つて呉れやう譯もなく、否でも應でも此人の懷中から拂はなくつちやならない破目になつたのよ。それで青息吐息肩の息と云ふ年の暮れだつたと云ふ話し、赤い舌のペロリも斯うなつちや閉口垂れるわネ。

藝妓は猫だ、お客を騙す、氣を附ける油斷をするなど能く世間で云ふやうですけれど、今ぢやお客の方が利口になつて、騙す筈の藝妓の方が

反對に騙されることが多いわ。世間が伶俐になつたのか、狡くなつたのか、それとも亦開けて来たのか知らないが、此の鹽梅で行つたら、仕舞ひには「何うしたら藝妓を騙すことが出来るか」なんて學問が出やしまいかと、取り越し苦勞かしらないけれど心配になつてよ。

「妾どうくあの人に騙されてよ」

「又〇〇屋の姐さんは男に丸ッ裸されたんですとサ」

「裸で道中は出来ないネ」

此麼話しが毎日々々有るやうな事になつたら藝妓も上つたりネ、尤も下つちや猶一層可怖いけれどよ。

にやんのたわごと (終)

大正六年九月三十日印  
大正六年十月三日發行

にやんのたわごと

定價金六十錢

著者 丸 奴

發行者 各務 松平

印刷者 吉原 良三

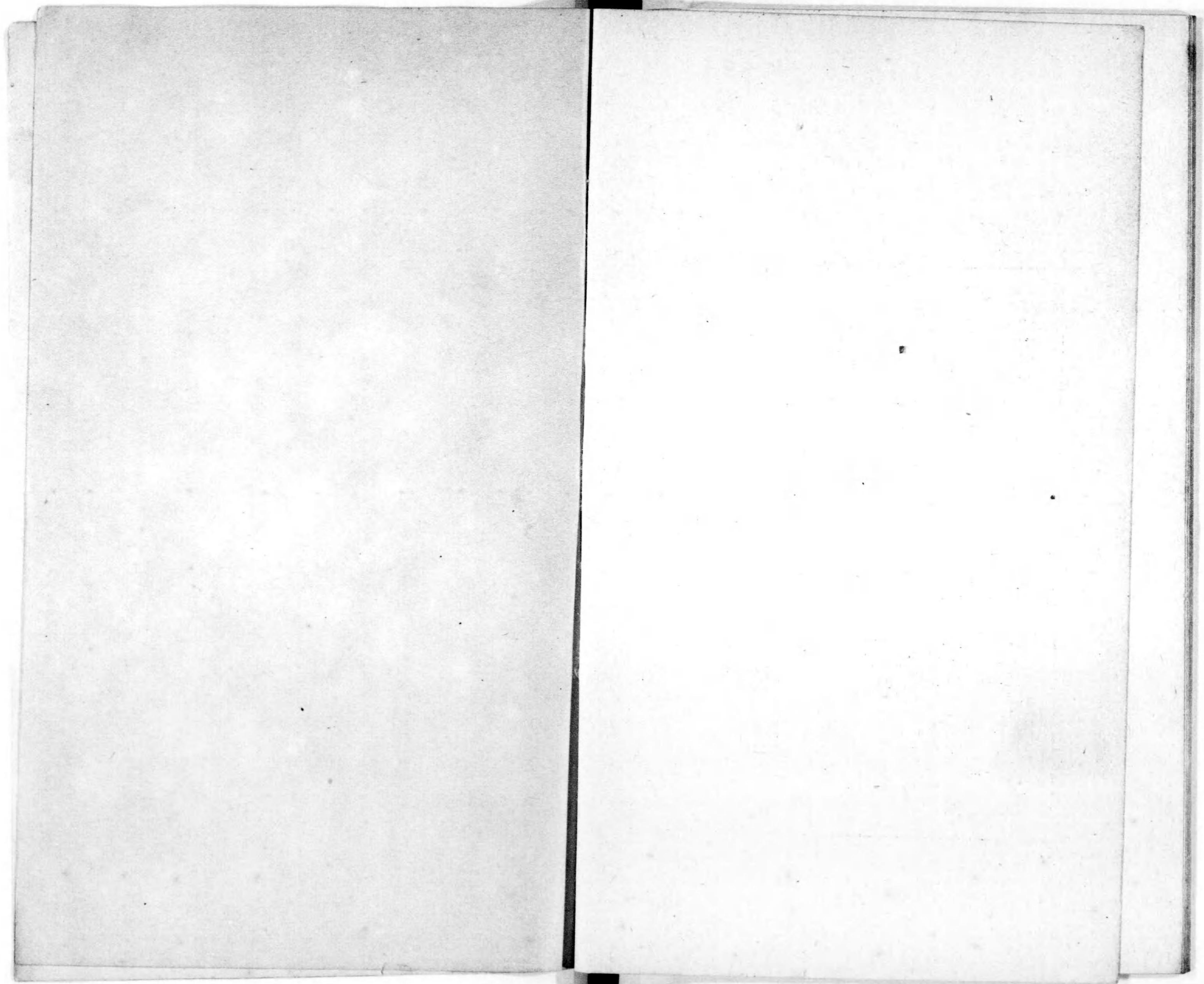
印刷所 報文社

不許  
複製

發行所

東京市京橋區北紺屋町一丁目

千代田出版部



279
204



終

